苦しみを抱えたＡとの交流
―「変わりたい」という声なき声を聴く―

私立高校　田島直樹

はじめに

私は、私立高校で勤めています。２０２１年の４月、新卒で常勤講師として採用されました。私が生まれ育った地域にある学校なので、勤務校のことは知っていました。「金髪のギャルが集まるヤバい学校」というイメージです。しかし、大学生になり教育のことを学ぶ中で、この学校に抱く印象が変化しました。この「ヤバい学校」は、私立学校という特性を生かした自由な教育実践を行っており、教育界でも一定の知名度があるものだということを、私は大学生になって初めて知りました。

雑誌『教育』や『高校生活指導』に書かれてあるこの学校に関する実践は、どれもが日本の学校にうまく適応できなかった（しなかった）子どもたちが集まるいわゆる「困難校」において、生徒たちの「困難」の背景に社会の「困難」を見据えて行われているものばかりでした。「自分もこの学校で教員として働きたい！」と思い、採用試験を受験しました。とはいえ、無事に採用されたはいいものの、教員という仕事の難しさを痛感する日々を送っています。

Ａとの出会い

新卒１年目から、いきなり新入生の担任になりました。全員で32名、女子の多いクラスです。元々女子校だったこともあり、学校全体として女子の比率は高いです。右も左もわからない中、生徒たちの抱える「問題」の大きさに打ちひしがれていました。一人ひとりの生徒を丁寧に見ていこうと思っても物理的に不可能です。しかし、日々の時間を少しずつでも共に過ごす中で、徐々に関係性を作っていくことが大切だと実感させてもらいました。

Ａという生徒がいます。彼女は入学時の面談では終始無表情で、ほとんど言葉を発しません。保護者も交えたこの面談の最中に、母親だと思っていた方が祖母だということがわかりました。個人調査票には両親の名前が書いてあるので、何か事情があるとは思っていました。

ところが、このＡは問題行動など全く起こさないので、ともすれば視界から外れてしまいそうになります。強烈な女子たちにもみくちゃにされる日々で、Ａと過ごすのは放課後の時間でした。Ａは入学試験の成績は良いとは言えませんでした。しかし、入学直後から放課後は毎日教室に残り、授業の復習をしています。

私の日課の一つに、放課後Ａに話しかけることがいつの間にか加わっていました。「勉強好き？」「なんでそんなに勉強するん？」「友達できた？」「好きなこととかある？」しかし、何を聞いても返事はありません。不思議そうにこちらを見て、うなずくか首を横に振るだけです。まるで能面を被っているかのように、全く表情が変わらない彼女との会話は難しいものがありました。

Ａと「議案書討議」

５月、ゴールデンウイークが明けたころから、Ａと会話ができるようになりました。印象的なのは、私がＡに声をかけるといつも決まって「私に話しかけてる？」と返ってきたことです。放課後の教室、私とＡ以外は誰もいない空間。「普通」に考えれば、私が声をかけるのはＡしかいません。しかし、Ａにとっては自分に話しかけられているのか、判断ができなかったようです。私にとっての「普通」が通じないことを感じた出来事です。このことに気づいてからは、まずＡの名前を呼んでから話しかけるようになりました。彼女との付き合いが１年以上

経った今は、放課後教室に残っている彼女のもとへ近づくと、「なに？」と顔をあげてくれるようになっています。

６月、私の勤務する学校では生徒総会が行われますが、その取り組みは特殊なものです。生徒総会に向けて、生徒会執行部の生徒たちが自分の抱える「困難」を赤裸々に綴った文章を書きます。それを「議案書」に掲載して、各クラスで読み合わせを行います。この「議案書」を読むことを通して、一人ひとりが抱える苦しさを共有することで、その苦しさは個人の責任ではないということを自覚する契機となります。生徒たちの視点が、「個人」から「学校」や「社会」に広がることを目指しています。

生徒会の「議案書」を各クラスで読み合わせた後、放課後に一部の生徒で自分たちのことを語り合う時間を設けます。これを学校では、「議案書討議」と呼んでいます。クラスの生徒たちにも、自分の経験を文章にしていくように指導していきます。実名で、顔を合わせて、自らの経験を自らで語るためには、安心できる雰囲気が必要だと感じます。これまでの人生で、何度も傷つけられてきた生徒たちにとって、他者と関わることはとてもハードルが高いです。だからこそ、「語ってもいい」「語りたい」と思えるように、クラス全体ではなく、放課後に少人数で行うことが重要だと思います。

１年次のクラスでは、この「議案書討議」を行えました。しかし、２年次のクラスでは「議案書討議」を行うことができませんでした。10人ほどが放課後に残っているものの、誰も自らの経験を書き、語ることができなかったのです。その原因は、生徒間の関係をうまく作り上げられていなかった点にあると考えられます。クラスの中に安心できる空気を作ることが教師にできるのかは疑問ですが、もう少し生徒たちが語り合えるようなアプローチができたのではないかと反省しています。

Ａは、１年次に自らの経験を綴り、２年でもそれに加筆をしています。しかし、２年間とも、文章を読み上げることはできませんでした。Ａをはじめとする生徒が口々に言うのは「私のことに誰も興味ない」「話したって仕方ない」「誰にも言いたくない」というセリフです。個人の経験を語らせることが自己目的化してしまう状態は避けられるべきだと常に内省をしながら、しかしやはり、私は生徒が自らを開示することを生徒たちに求めます。

Ａにとっても、彼女が自らの経験を綴ったことは意味があったと信じています。

Ａの面談に祖母が来たのは、父親との関係に原因があ

りました。両親はＡが４、５歳のころに離婚しています。父親に引き取られたＡですが、父親は次々と女性を家に連れてきます。虐待を疑われるような言動を繰り返す父に反抗するも、さらなる抑圧がかけられ、Ａの心は閉ざされていきます。家庭に居場所のないＡは学校でも辛い経験をしています。他の生徒から嫌がらせをされていることを担任に言えず、言葉の乏しいＡは、むしろ悪者に仕立て上げられます。苦しみを抱えたＡは小学５年生の時に、勉強することをやめたそうです。中学３年の秋、父親と再婚相手との間に、新たな子どもが生まれます。それを機に、父親らとは離れて、父方の祖母宅でＡは暮らし始めました。私が彼女と出会ったのは、このほんの数か月後でした。

Ａの文章はＢ４一枚を埋め尽くすほどびっしりと書かれているのですが、その一部を引用します。

中学生になり、クラスの子らにいじめられました。このときにはもう誰かに相談するという選択肢が頭になかったので、誰にも相談しなかったので誰も助けてくれませんでした。二年生の時も、男子にいじめられ続け、三年生の時には人を信頼することや人への興味がなくなり、いつの間にか一人でいる方が好きになりました。みんなからは影が薄い、リアクションがないとか言われましたが、他人のことに興味がなくなっていたし、責められるよりも悪口の方がまだマシだと思うようになっていたので、あまり気にすることがなくなりました。それと、騒がしい場所にいるとストレスがたまるようになったり、感情が分からなくなったり、自分が思っていることをすぐに言えなかったりすることが多くなりました。感情をうまく表現できなかったり、伝えられなくなりました。ただ、中三の時には少し仲が良い人らもできました。その人たちと関わっているとボッチを確実に回避できたし、友達の友達とも仲が深まったりしたから中学三年の時が一番楽しかったです。

中三の秋から、父とは別々に暮らしています。父と再婚相手との間に子どもが生まれたからです。私は祖父母と一緒に暮らしています。別々に暮らすようになっても、お父さんのことは変わらずに嫌いです。再婚相手の人に家事などをすべて押しつけているし、平和な環境で妹のことを育てているのかが気になるときがあります。

Ａは、この文章を放課後の「議案書討議」で語ることはできませんでした。ただ、Ａの文章を私が代読することは了承してくれたので、私が文章を読み上げました。

Ａは誰が書いたのかを匿名にしてほしいと言うので、そのようにしましたが、おそらくその場にいる全員がＡの文章だと分かっていました。Ａの意思を尊重して決して書き手の詮索をしない生徒たちの優しさを感じました。

Ａはクラスメイトに対しても非常に無愛想でした。話しかけられても、笑顔で対応するなどはもちろん、ろくに返事すらしません。そのため、少し敬遠されているようでした。しかし、Ａの過去を知ることで、生徒の間にもＡを理解しようとする雰囲気が生まれます。人を見るとき、自分の目の前に現れている姿だけが全てではないということを生徒たちは自然と理解したようです。

その後、Ａの文章をクラス全体でも共有することにしました。クラスの生徒たちはＡの文章を読む私の声に耳を傾け、数人の生徒が自分の経験を綴ってきました。他の生徒たちも「Ａに共感できる」「この人は、～と感じていたのかな」など、Ａへのメッセージとも読める感想を書いてきます。それら一人ひとりの文章を手渡すと、「この人、全然私の気持ちわかってないわ～」などと笑いながら読んでいたＡの姿は私の記憶に刻まれています。とはいえ、ここには反省もあります。Ａの文章を読み上げた時、クラスの生徒が聞こうとしなければ、Ａを傷つけるような発言をすれば、私はどうしていたのだろうか、と自問するからです。深い思慮のない私の行動が、何度も傷つけられてきたＡの心をまた傷つけるところでした。

Ａの変化

２学期からは、Ａをどうにかクラス活動に巻き込もうと必死になる私と、それを面白がるように私の誘いを断り続けるＡの関係が続きます。私「文化祭の準備するで。協力して！」Ａ「なんで私がそんなことせなあかんの？私にメリットなくない？」２学期のはじめは、私とＡが一対一でこんな会話を延々と繰り広げていました。

Ａはごくまれに放課後のクラス活動に参加していました。本人曰く、「担任に雑用を押し付けられただけ」らしいですが、彼女が少しでもクラス活動に参加したことが嬉しかったです。Ａは行事後の総括には必ず「面倒くさい。時間の無駄。行事なんてすべてなくなれ」と書いてきます。これは本心だと思いまが、球技大会でクラスメイトとバレーの練習をできたのが楽しかったとも語っていました。微かにでも「楽しい」と思えた瞬間があったということが、私にとって嬉しいことでした。

自分から人に話しかけることはないＡですが、１年の後半には彼女の周りに数人の生徒が集まるようになります。ひたすら真面目に勉強をするＡを信頼して、勉強を教えてもらったり、おしゃべりをしたりしていました。特に勉強面では、大人しい生徒だけではなく、クラスの「ボス」的な女子も彼女を頼りにしていました。普段から仲よくするわけではないけれども、勉強を聞かれれば一生懸命に教える姿が見られました。

Ａ自身、中学生のころは授業の内容についていけず、苦しかったそうです。しかし、高校に入学してからコツコツと勉強を積み重ねて、授業の内容をすっかり理解できるようになっていきました。私は、学校の授業が全てだとは思いませんし、テストで高い点数を取ることだけが重要だとも思いません。ただ、これまでテストの点数で比較され続け、傷つけられてきたＡが「数学で１００点取れたのが嬉しすぎて、家に帰ったらすぐおばあちゃんに自慢した！」と笑顔で語っている姿を見ると、テストで高い点数を取るということもＡが抱える傷つきからの「回復」には必要だと確信を持ちました。

２年生になったＡ

私は、２年に進級したＡを引き続き受け持つことになります。Ａは、１年の３学期にはクラスについて、他の生徒と意見を言い合えるようにまでなっていました。しかし、クラス替えで知らない生徒ばかりになったため、会話をできるのは私だけという状態になってしまいます。

コミュニケーションの仕方があまりにもぶっきらぼうなため、１学期のはじめはクラスメイトとの間に距離があったようです。しかし、気づけば彼女とクラスメイトが話している姿が見られるようになりました。休み時間には、１年のころ同じクラスだった生徒がＡのもとへやって来て話している姿もありました。Ａが自分で誰かのもとへ行くことはまずありません。基本的に、彼女は自分から人と関ることを避けているように見えます。

２年の「議案書討議」では、Ａが１年のころの文章に加筆しています。ふたたび、その一部を引用します。

小学校の低学年の頃は、バカやったから他人に何を言われても気にしていませんでした。でも、今は他人と関わりたいとはあまり思いません。他の子と関わろうと思えないのは、みんな何か裏がある気がするのと、人に関心が持てないからです。グループみたいになるのも嫌です。で

も、他人から話しかけられるのは別にいいです。ただ、話しかけられるとぎこちなくなってしまう時があります。高校に入学してすぐのころは、知らない人ばかりでやばかったです。自分から話しかけるのが得意じゃないから、クラスの子とも、先生とも話ができませんでした。慣れれば大丈夫やけど。

去年はクラス活動にも少し参加しました。気分というか、誘われたからついて行っただけですけど。行事のことを色々やろうとするとお金がかかるし、他の子と仲良くできる自信ないし、勉強しようと思う気がなくなってしまうと思っています。だから、あんまり参加したくないです。人と関わりたいという気持ちは今でもあまりないです。

この文章からはＡの葛藤をとても強く感じます。本当は誰かと話したい、一緒にいたいという思いが心の底から湧き上がってくる。しかし、Ａにとって、他者と関わるという行為自体がトラウマとなっているため、自分で自分の心にブレーキをかけてしまっているようです。

２年目の文化祭でのＡ

２年の文化祭を１年前の文化祭と比べると、確かに彼女の変化を感じます。クラス活動に関心を示し、不器用ながらも関わろうとした瞬間が増えてきたと思いました。

私の勤務校の文化祭は少し変わったものです。各クラスがそれぞれ設定したテーマについて学び、その内容を展示することを文化祭の軸としています。これは「学ぶ文化祭」と呼ばれています。この活動にすべての生徒を参加させることは、はっきり言って不可能です。そもそも、日常の授業も成立しているとは言い難い状況で、なぜ「学ぶ文化祭」なのかという意見もあろうかと思います。しかし、たとえ一部の生徒しか真剣に取り組んでいないとしても、生徒会が中心となり、学校全体で「学び」を大切にしていこうとすることに意義があります。私は、生徒が学びから「逃走」するからこそ、学びに向き合わせることが必要だと考えています。古くさくて、生徒の実態と乖離しているように思える文化祭ですが、だからこそ逆説的に、生徒に必要なものだと思えてなりません。

とはいえ、文化祭は単なる「学習発表会」になっているわけではなく、模擬店や舞台発表、制作物の販売、教室の装飾なども各クラスで行われています。

私が担任するクラスは、修学旅行の行き先が沖縄とい

うこともあり、テーマを「ひめゆり学徒隊」に設定しました。夏休みから学習会を開催し、少しずつ沖縄戦についての学びを深めていきました。１年の時には学習会に全く参加していなかったＡも数回参加していました。沖縄戦について学ぶ中で、Ａは「ひめゆり学徒隊」の生徒に感情移入し、引率教員の苦しさにも思いをはせるようになっていきます。そして、人々を戦争に駆り立てていった当時の教育のあり方に疑問を持つようになりました。

また、文化祭の当日には軽量粘土で作ったシーサーとミサンガを販売しました。いつの間にか粘土でシーサーを作る名人になっていたクラスの男子から、Ａは作り方を教わっていました。「どうやるん？　見本みせてー」と、声をかけて、クラスメイトとシーサーを作っていました。

一年前には「雑用ばかりさせられた。行事なんてなくなれ」と文化祭の振り返りに書いていたＡですが、２年の文化祭では学んだことがたくさん書かれていました。「面倒くさい。暇。時間の無駄」とも書いていましたが。

同時に、Ａが考える勉強の意味も少し変化してきたように思います。昨年までのＡは、テストで高得点を取ることが全てで、テストの点数に関係ないことは学ぶ意味がないと言い放っていました。しかし、２年になってからは、授業内容そのものに関心を示すようになってきています。感想を書くことがとても苦手で、箇条書きでしか書けなかったＡが、一生懸命に感想を書こうと挑戦しています。Ａの発言が「どう書けばいいかわからへんから、書けへん」から、「どう書けばいいかわからへんけど、みんなこうやって書いてるんかなーとか想像しながら書いてる」に変わったことは、大きな変化です。

おわりに

固く閉ざされたＡの心を開くのは容易ではありません。彼女が生きてきた15年という歳月の重みを、日々感じています。それでも、私や他の教員、クラスメイトたちと関わる中で、Ａが少しずつ変化してきていることも事実です。私には、Ａが変わりたい、成長したいというメッセージを、不器用ながらも出し続けているように思えてなりません。彼女の人生にとって高校生活は短いですが、いつか芽を出すことを信じて種を蒔き続けたいです。また、私自身、教師としてＡから学ぶことがたくさんあります。彼女との交流の中で、教師として何をすべきかをこれからも考えていきたいです。（たじまなおき）

田島直樹
〒５９１－８０３１
大阪府堺市北区百舌鳥梅北町４－２３６－２カーム
コーポ４０３号室
Tel:０８０－８５１８－７７５４
Mail:naoki1997tajima@gmail.com